



学校だより

～ ひびきあう心 かがやく笑顔 ふれあいの丘 斎藤分 ～

令和3年 11月30日 12月号

横浜市立斎藤分小学校 校長 黒木 健

これから求められる資質・能力と学校の対応

校長 黒木 健

肌寒さを感じる季節となって参りましたが、本校保護者の皆様、地域の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。さて、今月の学校だよりは、「これから求められる資質・能力と学校の対応」と題して、話をさせていただきます。

小学校では、昨年度から導入実施となった新学習指導要領（文科省が定めた学校教育のガイドライン）において、「思考力・判断力・表現力等」がより重要視されるようになってきました。では、ここで言う「思考力・判断力・表現力等」とは、一体どのようなものなのかというのが、今月の学校だよりで明らかにしたいことです。その意図するところをかみ砕いて述べれば、「子ども自身で調べて分かるものはもはや知識とは言えず、またこれまでと比べ、要素的な知識や技能の価値が低下したことにより、断片的な知識の所有は学力とは呼べなくなり、逆に細かい知識を足場として、知識と知識とを関連づけながら概念的な理解へと高めていくことを目標とした学び。」と、言い表すことができるのではないかと思います。それは、従来型の「(断片的な)知識を基盤とした学力観」から、「資質・能力を基盤とした学力観」への転換と言い換えることも可能でしょう。その一例として、大学のAO入試などは、従来型の「前者」の学力観によるものではなく、「後者」の学力のみを合否基準とした入試であると言うことができます。また、昨年度から導入された「大学入学共通テスト」が資質・能力を求める内容へと既に変化したように、今後の大学入試は、「後者」の学力をより重視した出題形式へと移行していくことは間違いありません。

私が児童生徒だった頃、鎌倉時代は1192年の鎌倉幕府開設が始まると一方的に覚えさせられた記憶がありますが、文科省が示す方針に従って考えれば、これらをもはや知識とは呼ばなくなったということであり、また最近では、源頼朝が征夷大将軍になった1185年を鎌倉時代の始まりとすべきという学説も現れ、そもそも歴史の年号を機械的に覚えること自体に、かつてのような意味はほぼなくなりつつあります。またもし、源頼朝について知りたいと思い、タブレットを使ってそれを調べれば、基本情報を誰でも直ぐに取り出すことができる時代です。そうなってくると、「教師が教えるものがなくなってしまうのでは。」という声が聞こえてきそうですが、児童生徒側に「思考力・判断力・表現力等」が求められているわけですから、教師側にもそれに呼応する「探究的な授業」を行う必要性が生じるのは必然的な流れです。単なる基本情動的な知識の習得を促すことに止まらない、一通りの情報を得たその先で立ち上がる問いを出発点とする授業へと高めていくことを、文科省は今まさに学校に求めているのです。

今更ながら「教える」ということは、どのようなことと捉えるべきなのでしょう。文末の参考資料にある奈須教授によれば、「教えるということは、子どもたちが何となく知っている、既に所有しているインフォーマルな知識を、教科の見方・考え方に沿ったフォーマルな知識へと洗練させ変えていくこと。」だとし、続けて「小学校1年生の児童であっても幼稚園・保育園で過ごした経験があるわけで、全くの白紙の中に教えるものではないこと。小学校での学びをゼロからのスタートと捉えるのではなく、既に子どもたちが知っている、でもはっきりとは知らないことを、足がかりに教えていくことが大切である。」と述べています。

本校は、小規模校という子どもたち一人ひとりの教育的ニーズを教職員全体で把握しやすい環境にあることから、そうした学校特性も生かしつつ、子どもたちにとっての「個別最適な学び」の実現に向け、引き続き、きめ細やかな教育活動を行ってまいります。